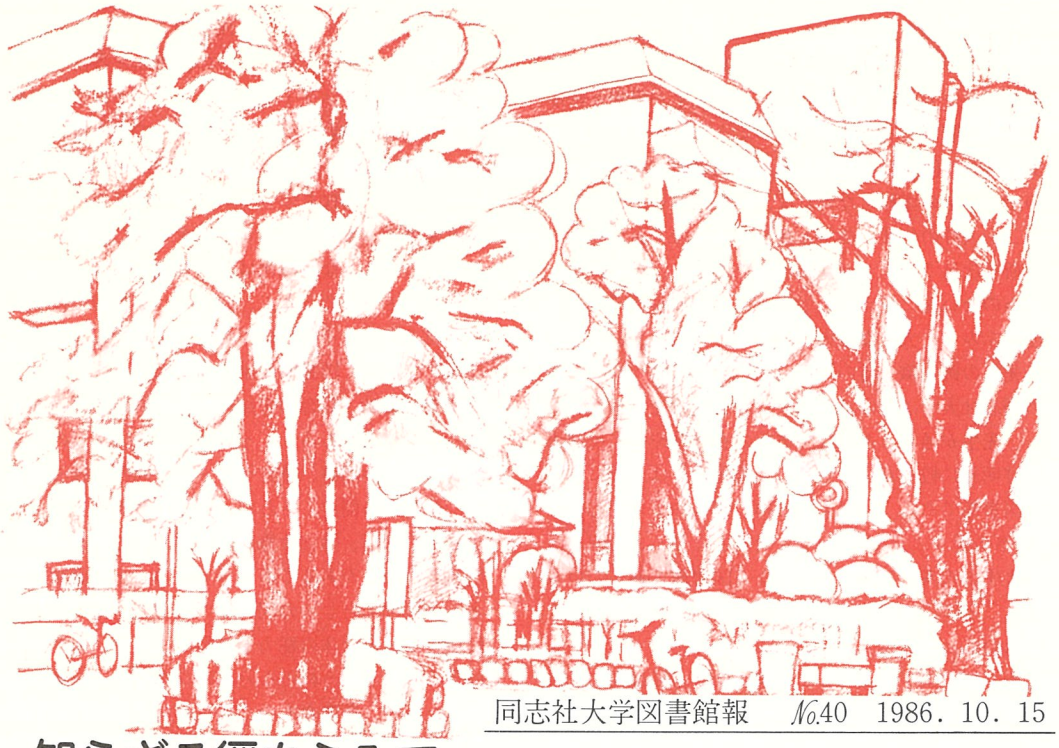
びぶりおてか



同志社大学図書館報　No.40　1986. 10. 15

知らざる徑をふみて

図書館長　川　島　秀　一

図書館を、それにふさわしく読書し研究する場所にする者もいれば、友人と出会う場所にする者もいるであろうが、それは問わないとしてまず次のことを御報告したい。図書館に入館し入室してくる一日平均の学生数は四月では今出川3,125名、田辺（ラーネッド記念図書館）3,274名、計6,399名、五月では今出川4,485名、田辺3,662名、計8,147名、六月では今出川4,920名、田辺4,438名、計9,358名であった。両館内の開室日数にはそれぞれ異同があったが、四月から六月の開室日数およそ70日余の間に入室した学生の総数は588,930名であり、各月の一日平均の学生数を前年同月のそれと比較すればおよそ四月、20%増、五月、18%増、六月、31%増である。この増加の一つの要因は明らかに、田辺のラーネッド記念図書館の開館によって館内の過密が解消され、読書にふさわしい場所が得られるようになったことにあると思われる。この増加はまことによろこばしい現象であり、とりわけ、その名を田辺の図書館において記念されているラーネッド先生は天上にあってよろこばれておられることであろう。というのも先生こそ図書館をこよなく愛された人であるからである。

ラーネッド先生(Dwight Whitney Learned,1848-1943)はデェヴィス先生とともに新島先生を助けて同志社大学の創立と発展に生涯を捧げ初代学長となられた人であり、荒木良造第二代図書館長によれば「図書館通いは学内随一であり、借り出し図書利用も他の教授の及ぶところではなかった」ということである。ラーネッド先生は八十

目　次

知らざる徑をふみて……1
図書館の将来を考える……3
これからの図書館と資料行政……4
図書館に期待すること……5
実例を中心とした資料のさがし方(30)…6
図書館学に関する二次文献(上)……8
〈キリシタン関係資料展〉案内……10
〈新島襄・同志社関係資料展〉案内……11
ラーネッド記念図書館
カウンターから……12

歳に至るまでの53年間にわたる長い同志社への奉仕を終えられ南カリフォルニア、クレアモントのピルグリム・プレイスに引退されてからも、16キロ離れたポモナ市の図書館にまで歩いて通われたそうである。これほど図書館を愛された人も稀れであろう。その先生が帰米される時に初期の同志社を回顧して次のように述べておられる。「実に当時の同志社は学校と称ふる程のものでなかったもので、一定の学科もなければ、また校舎もなかった上で、二十人許の生徒が英語と数学を学ぶ所であったのです。斯る次第で、凡てが甚だ不備であって、将来に殆んど望みのない様に見えたのですが、実にそれが『知らざる徑(ミチ)をふみて』大いなる大学となる可きものでありました。」先生の御在職当時の「大いなる大学」と較べれば、今日の同志社大学は、はるかに大いなる大学であろうし、また、先生が通われた初代図書館の有終館や第二代図書館の啓明館に較べれば、今日の図書館は、はるかに大いなる図書館であろう。見えざる神の導きの下に同志社は「知らざる徑をふみて」大いなる大学となり、この四月以来、ますます多くの学生が大いなる図書館に通っているということは、まさにラーネッド先生とともにおよろこびしたいことである。

しかしこのようによろこびを述べながら私は内心、忸怩(シク ジ)たる気持でいる。というのは文学部には図書館学の先生や、図書館をつねに利用し図書館について深い理解をお持ちの諸先生がおられるにもかかわらず、図書館に余り足を運ばなかった私が文学部からの初めての図書館長をお引き受けして先のようなよろこびを述べているからである。それだけに一層、責任を痛感している。図書館に余り通わなかったのは、専ら自分の書物で学び、不足の書物は研究室図書を利用させていただいたからであるが、今日の図書館を見て思うことは、私の学生時代の図書館(啓明館)が田辺のように開架式の快適な閲覧室を備えたものであったならば、もっと利用したであろうということである。出来れば、今出川も全館開架式となり、また、複本や複数のセットが一層増加されることも望ましいであろう。しかしこのようなことは、今は主・客、所を変えて私自身が取り組まねばならない問題である。

かつて助手時代に、文化学科の図書の受入れ、分類整理のために研究時間をつぶして三年間、ぼやきながらも一所懸命に働いたことがある。というのは、放っておけば一週間で大きな机の上が書物の山になるからである。今では、これらすべての仕事を図書館と研究室事務室が処理して下さっているので有難いことである。図書、資料、雑誌を研究者に速かに利用していただけるようにすることや、各部局の予算ではまかないきれない大型のものを全学的視野において調整し入手できるようにお世話することは図書館の仕事であるが、これに関連して多くの問題や課題がある。とりわけ、田辺において行なわれた貸出返却、目録検索の機械化が全学的に実現されねばならない。貸出返却の機械化は利用者の手続きを簡素化、迅速化し、プライバシーを保護することになる。参考業務の機械化はのちには、二つの図書館と各部局、さらに学内と学外をオンライン・ネットワークによって結び、どこの資料の内容もコンピューターの端末機によって完全、正確、迅速に検索することを可能にするであろう。それは他方、何枚ものカード目録を誤りなく作成し編成する繁雑で労多き手作業と時間を遥かに軽減することになる。このような機械化は、研究者が現代の情報の洪水に押し流されることなく、逆にこれを制御し創造の豊かな素材となしうるために不可避の課題である。このように見てくると、図書館は学習図書館であるばかりではなく研究図書館、総合図書館の機能を果たすことを自ら要請されているであろう。その他、各部局相互の図書資料、雑誌の重複の問題、雑誌センターの問題、狭溢化する書庫や保管庫の問題、あるいは視聴覚教育とテープライブラリーの問題、障害者施設の問題、また勤務条件の問題、財政問題等々があるであろう。このような課題や問題の多くは一部局としての図書館の能力を超えており、その解決には大学全体の総力を必要とするが、もとより図書館員がそれを担う核とならねばならない。現実的に差し迫ったもの、重要なもの、実現可能なものは何かがまず、よく考えられねばならない。そのいづれも私の短い任期中に解決を見ることは難しいが、これまでのように館員たちの協力一致によって必ず実りある成果を挙げることが期待されてよいであろう。

七月十九日に梅雨あけが報じられて漸く新学期が終わり、夏の青空を垣間見たと思う間もなく、梅雨戻りの豪雨に見舞われて、二十三日朝には田辺キャンパスのあちらこちらに崖崩れが見られた。しっかり固まっていない表層土とともに、植えられたばかりの新緑のさつきが道路にまで押し流され無残な姿を呈して、天水桶の底が抜けたような大雨に叩かれていた。ペスミスティックには、大学の予期しない苦難の前兆であるかのように見えもしたであろう。まもなく施設課員の泥まみれの努力によって復旧され、それからひと夏が過ぎ、やがて学生たちが賑かに帰校し、実りの秋が訪れようとしている。新しいキャンパスをかかえて大学はこれからも色々なことに出遭い、変わっていくであろう。しかし人びとの協力一致がある限り神は、同志社が「知らざる徑をふみて」大いなる大学となるように導き給うことを固く信じたいと思う。田辺の図書館の正面に“Learn to live and live to learn”と、ラーネッド先生の言葉が刻まれているが、先生はその言葉に続いて“Commit the way unto the Lord”(Psalm 37.5) と書かれたそうである。「あなたの道を主にゆだねよ。」という、この言葉が先の言葉をその背後から支えていることを銘記したい。

びぶりおてか発刊20周年を記念して

―― 図書館の将来を考える ――

工学部助教授　小　林　真　造

私が学生の頃、夏休みはいつも自宅の蒸し暑さに悩まされていた。それに比べて図書館という場所は部屋の片隅で扇風機が静かに回っているだけで十分涼しく、私にとって夏の図書館は「避暑館」で、読書と昼寝に恰好の場所であった。当時私と同じような気持で図書館を利用していた人が多かったせいか、大学の図書館も、岡崎の府立図書館もいつも大学生、高校生で満員であった。

最近本学の図書館へ夏休みにそれほど多くの学生諸君が来ていないのは自宅や下宿にクーラーがあるからだろうか、それともじっくり本を読む学生が少なくなったためだろうか。

多少想像めいた話になるかも知れないが、将来の図書館を「機械化」という点から少し考えてみようと思う。アメリカではすでに1960年代半ばから図書館業務の自動化が始まり、20年後の今日では、カード目録がほぼコンピュータによるオンライン目録に変ったといわれている。私が1978年にオハイオ州立大学を訪れたとき、図書管理システムに関しては同大学が開発の先導役を果している、と案内してくれた教授が語っていた。中央図書館の外に20以上もの学部図書館を持つこの大学では、総合目録の管理と検索システムに学内の計算機センターのスタッフが知恵をしぼっているとのことであった。8年後の現在、かなりの自動化が進んでいると思われる。田辺校地のラーネッド記念図書館では、図書の貸出し、返却、貸出し予約などの業務がコンピュータに記録させる方式で行われており、コンピュータの端末機による図書検索もできるようになっている。いずれ目録検索用の端末機が増設された時点で従来のカード目録は廃止されるとのことである。一方今出川校地図書館でも1989年度から機械検索設備を備える準備が進められており、本学の図書館も少しずつではあるが機械化の方向に向っているようである。コンピュータの処理機能を図書館業務に利用することは今後ますます進むであろう。例えば会議の資料をワードプロセッサで作成し、その資料をコンピュータに記録させる。資料の目録と資料番号は予め情報検索システムの中に入れておき、それで検索を行い、目を通したい資料の番号をディスプレイ端末で見るという方法はいずれ図書館で採用されるであろう。

8月中旬の新聞で、図書館情報大学がコンピュータを利用して図書館の検索や目録作りなどを自動化した図書館管理情報オンラインシステム―「エリゾン」(部門間の連絡という意味）を5年がかりで開発し、運用し始めたことが報じられた。これは図書の購入、目録作り、貸出し、返却、閲覧をコンピュータで管理するシステムで、同大学構内に設置されている端末機から、このシステムによって図書の購入注文もできるようになっている。今後他大学と直結させ、図書に関する情報交換などにも役立つと思われる。また去る9月1日に新装成った国立国会図書館では、全国の図書館からの資料請求に応えられるようにファクシミリを導入し、サービスの向上を計っている。最近急速に発達してきたコンピュータ技術と通信技術とを組合せたデータ通信技術は図書館の業務と大いに関係がある。例えば文献情報データベースと所在情報データベースを利用すれば必要な文献がどこにあるかを知ることができる。現状では必要な文献を手に入れるのは郵便によっているが、文献が光ディスクに記憶されると、電子通信方式によって文献が入手できるようになる。光ディスクというのはレーザ光線によって金属、セラミックなどのディスクに情報を書き込んでおき、レーザ光線の反射によって情報を読み取るもので、磁気テープ、磁気ディスクに比べて物理的に安定しており、大容量の情報を書き込めるという利点があり、磁気ディスクに代るものとして注目されている。

データ通信システムが図書館業務に応用されるようになると、利用者はディスプレイを通して、現物がそこにない資料の中味を見ることができるようになる。これは紙に印刷されたものがないところから「ペーパレス情報システム」と呼ばれており、その実現は十数年後と予測されている。高度情報化社会という言葉を耳にする今日、図書館も「機械化」・「自動化」を要求されるだろうが、これにはぼう大な人件費、設備費を要し、どこまで社会のニーズに応えられるかという問題もあり、上述したようなシステムが本学の図書館に実現するのは遠い将来かも知れない。

私は「大学の図書館」を充実させていくのは活気に満ちた研究活動と学生諸君の意欲ある学習活動であると思う。図書館は文献や資料とそれを必要とする人との有機的な関係の場であり、教職員と学生との要求によって育っていくものであると考える。冒頭に図書館に学生の姿が少いと記したが、学生諸君には大いに図書館を活用してもらいたい。今我々の大学は今出川と田辺の両キャンパスに立派な建物の図書館を持っている。これらの図書館が外観のすばらしさにふさわしい中味を備えたものとして今後さらに充実していくことを望みたい。

――これからの図書館と資料行政――

教務部学事課企画調査係長　堀　川　　宏

第52回国際図書館連盟（ＩＦＬＡ）東京大会がこの８月24日から29日まで青山学院大学を主会場にして開催された。「21世紀への図書館」を統一テーマとし、サブテーマは「ニューメディアの影響」、その中での「図書館サービスの変化」「図書館員、情報専門職の教育と訓練」「情報利用による国際協力」などが議論されている。

これらのテーマをみると図書館を取り巻く環境の変化の激しさを知ることができる。そして、それはますます加速化してゆくことであろう。このような状況の中で大学図書館の担う役割も著しく変化してきている。

ここでは「21世紀の図書館」について述べるようなことは到底できない。したがって、これからの高度情報化社会において教育・研究に対処してゆかねばならない大学図書館のあり方、特に同志社大学における図書館と学部研究室との関係、また資料行政について思いつくところを述べてみたい。

昭和38年当時、日本の大学図書館の実状を見たハーバード大学図書館副館長は「日本の大学図書館が、近代的な教育と学術研究に十分な寄与をすることができないのはその管理、運営の機構が極度に分散化しているからと思われる。各学部・学科・研究所等に属する個々の図書館が、学内の他の図書館から孤立している。それらの収書計画と奉仕活動を調整し連絡しようとする努力は、ほとんどなされていない。……」と『大学図書館の近代化をめざして』の中で指摘している。本学の図書館業務も機械化され、設備も整えられ近代化されてきたが、この指摘はまさに本学の現況に当てはまるのではないか。これらのことを認識したうえで、本学の図書館および研究機関の機能がより一層向上し、その運用制度、運用方式が利用者本位のすぐれたものになればという観点から次の３点について考えてみた。

まず第１に図書館と“情報センター”とのかかわりである。さきの田辺校地整備計画の検討において、教育情報センター部門改善委員会は図書館と計算機センターとの関連を重要視していたので、田辺校地に新しい型の学術情報センターの誕生を期待していたのであるが、残念ながらそれぞれが別機構でそれぞれ自己完結した施設となってしまった。田辺校地の新しい図書館は全館開架方式を意図して建築され、図書の検索手段である目録カードを廃止した、いわゆるカードレス・ライブラリーを実現させ、貸出・返却の手続きもコンピュー化した新しい機能の図書館になった。こうした図書館業務の機械化をみると学内資料のオンライン検索は近く実現されるであろうし、問題は多くない。しかしこれから予想される多様化した教育研究体制に対応してゆくためには、国内・国外の各種データベースの活用およびオンライン情報検索システムの導入が急がれる。さきの「中・長期教学検討委員会答申」で示している“情報センター”と図書館とのかかわりを図書館、計算機センターが中心となり具体的な検討を進めるべきであろう。

第２に研究室についてである。現状では学部ごとに、あるいは学科ごとにこまかく分散されているため運用制度、運用方式が決してすぐれたものではない。あまりにも分散化され、それぞれの間での調整すらできない状態である。資料を分散させるか集中させるかは大学それぞれの歴史や風土があり容易に結論づけられるものではない。しかし現状のまま放置すれば将来的に研究者にとってよりよい研究条件は生れてこないであろうし、研究支援体制も決してすぐれたものにならない。昭和51年に法・経合同の研究室棟が建設され、これを中心に“社会科学センター”にしてゆく計画案があった。これは単なるプランに終っているが、各学部の資料をできるだけ大きな学問分野ごとにまとめそれを中心に関連の研究個室、共同研究室などの諸施設をまとめてゆけば、機能的にもかなりすぐれたものになっていくであろう。

近年新しく建設された慶応義塾大学三田図書館や上智大学図書館などにみられるように学習図書館と研究図書館とが同居する型のものも現われてきている。これには学部研究室のスペースの狭溢さから集中同居へと進んだのであろうが、本学の各学部研究室はどこも同じ問題をかかえている。したがって学部研究室を全学で３つ位の学問分野にまとめた研究図書館として統合してゆけば機能面、経費面、人的な面、研究の活性化からも効果的である。

第３に雑誌のバックナンバーについてである。すでに本誌や大学広報でも述べられているが、本学所蔵の雑誌のバックナンバーの集中化を進める必要がある。すでに、東京大学、京都大学その他の大学で実施されているようであり、本学においても雑誌センターのような型で直ちに実施できなくとも部分的にでも実施を急ぐべきであろう。研究分野によって異なると思われるが利用頻度の落ちてくる部分を集中化してゆく方法もある。また集中化されても利用者の不便にならないよう、利用時間、複写などの体制をあわせて考慮されるべきであろう。これらの調整を図書館が中心となって早急に行なわねばならない。

以上の点に留意し、長期的展望にたった、本学の教育研究体制の確立が急がれる。またそれに見合った図書館、“情報センター”のあり方、資料行政の進め方など検討すべきことは多い。

田辺校地の完成でハード面は一応整ったといえる。ソフト面の立後れを早急にとり戻さねばならない。

――図書館に期待すること――

大学院文学研究科　今　市　優　子

「世の中便利になったものだ。」という言葉は何もお年寄りだけのものではない。私達も身近なところで「便利さ」を感じることの多いこの頃である。その「便利さ」はしばしば「機械化」として目に映るが、新しい機器やシステムを利用する時などは時代の流れを実感するものだ。「情報化時代」をむかえ、多様でかつ多量の情報が不可欠な今日にあって、学生が情報を求める図書館は常に「便利さ」をめざしてシステムの革新を迫られてきたように思う。

同志社大学図書館の館報も創刊から二十周年を迎えたが、その間図書館でも多くの変化があったようだ。十年前の十周年記念号では「新図書館」という言葉が使われているが、私達は現図書館を「新図書館」とは呼んでいない。「新図書館」という呼称はなくなったけれども、その図書館の中では新しい機器を導入して合理化が行なわれてきた。磁気チェックのシステムは、利用者がロッカーに荷物を預ける手間を省いてくれた。コピー機の台数がふえ、マイクロフィルムの利用機会もふえている。あるいは、今年度オープンした田辺校地の図書館を見て、機械化された姿に驚いた人もいるだろう。そして、今出川の図書館でも、カウンター前に置かれた新着図書のファイルを見れば、近い将来の大規模なコンピューター化を予測できる。このように図書館が情報提供の潤滑化のために新しい機器、システムを導入していくことは、図書館が常に「新図書館」であろうとする努力と必要性を示しているように思えるし、利用者の立場としても喜ばしいことである。

さて、私達利用者が理想とする新しい図書館とはどのようなものだろうか。利用に便利であることは非常に大切なことだと思うのだが、この「便利さ」は、けっして手続きの簡便さのみではかり得るものではない。私達は資料を早く簡単に入手することだけでなく、入手する情報の正確さ、質の高さをも求めている。情報が氾濫し資料が量・質共に増え続ける今日では切実な問題だ。また大学という研究機関の情報センターとしての機能をはたすには、かなり専門的に高度な資料の要求もおきてくるだろう。図書館で欲しい資料を探索するという楽しくもあり大変でもある作業をするには、何よりも目録や参考図書の充実が大事なことだ。つまり、一言で言えば情報提供のためのきめ細かなサービスが必要なのである。

ここで私達が資料を探すのに最も基本となる目録について考えてみたい。同志社大学に所蔵される資料は図書館だけでなく、各学部・学科の書庫や研究室、人文科学研究所、アメリカ研究所などに分散している。増加し続ける資料が分散していることは、資料の探索を複雑にしている。近年、逐次刊行物の冊子体目録が所蔵機関を明示するようになり、「便利さ」を実感しているが、この次は是非とも所蔵資料全てを図書館で探索できるような目録が欲しい。コンピューターが導入されれば、目録の体裁は今のものと異なった形になるだろうが、図書館が大学内の情報提供の核となり得るようなきめ細かなサービスが実現することを願っている。

さらに、欲しい資料を大学外の所蔵機関に求める場合にも、探索に便利な機能が図書館に求められている。そのためには、他の所蔵機関との横のつながりを充実させて、私用者の利用し得る情報サービスの輪をひろげていくことがのぞましい。これも、私達が求める「便利さ」の一つなのである。

以上のようなきめ細かな情報提供のサービスの実現にとって、コンピューターの活用は大いに期待されるが、一方、ある種の不安を覚えることがある。なぜなら、コンピューターは入力されたプログラム以外のことを考えて答えたりはしないからだ。コンピューターに対して「ちょっとした心遣い」を求めるのは無理な話である。私達が多様で質の高い情報を得るには、システムをつくる人が、各分野の初歩から専門的なレベルにまで応じられるような機能の構想を描いていなければならないだろう。また、新しい機器やシステムを前にしてとまどいを感じる私達に適切な助言者も必要である。せっかくのシステムを有効に使うには、図書館の職員とのコミュニケーションも重要なことであり、人的交流も「便利な、新しい図書館」には欠かせない要素だと思う。

ところで利用者としての要求ばかりを述べてきたが、利用者自身も、図書館の進歩のために考えておかなければならないことがある。簡単に資料が入手できるようになると同時に、その資料を大切にしない風潮がひろがってきたような気がするのだ。書庫にずらりと並ぶ旧分類の図書を見ると、よくぞ保存されてきたものだと感じることがある。古い書物を手にする時、ある重みを実感するものだ。一方、線が引かれ、書き込みが多く、時には破りとられたページのあるような図書を手にして残念に思うことも多い。十年後、一世紀後の利用にたえ得るように資料を大切にしなくてはならないのは当然のことである。利用者が利用者の首をしめるようなことは慎みたい。利用に便利な新しい図書館が実現していくには、図書館と利用者との相互理解が必要だろう。一利用者として図書館を大いに活用していくと同時に、時には卒直に、時には慎重に、感じたことや求めたいことを図書館にぶつけていきたいと思う。21世紀にむけて、学生生活、研究生活と密着した「便利な」図書館を期待している。

実例を中心とした 資料のさがし方 —30—

日米経済摩擦、円高、ベンチャービジネス、ＳＤＩ、指紋押捺問題といった比較的あたらしいことについての質問が最近カウンターに多くよせられています。そこで今回はそうした文献のさがしかたを、紙数の関係上一例にしぼって書いてみます。

〔質　問〕

日米経済摩擦についての文献や資料にはどんなものがあるか。

〔調査と回答〕

1.内容調査—辞書及び白書類による調査—

文献をさがす場合、まず、さがしているテーマやトピックについての概観を調べ、どんな内容のことで、歴史的にはいつ頃から問題になってきたのかを調べます。そこで「現代用語の基礎知識　1986」(031; G　参考室)を見てみます。「経済摩擦用語の解説」という大項目があり、その冒頭の「貿易摩擦」の項に「繊維、カラーテレビについで、81年には自動車摩擦が、日米、日欧の二つの極で発生した。繊維やカラーテレビと違って一国の基幹産業である自動車が問題となったので、対日批判は激しさを増した」とでています。そしてさらに、ハイテク、半導体、通信と摩擦が広がり深刻化してきていることがわかります。

以上のことを確認するために次の三つの白書類で1970年代の後半以後を調べてみます。

「経済白書」では昭和53年版に「高まった貿易摩擦と最近の輸出動向の変化」という項目がでてきます。

「通商白書」では昭和56年版に「我が国をめぐる貿易摩擦の現状と今後の方向」という項目が現われます。

「海外市場白書」では1981年版の貿易編に「貿易摩擦の高まりとその要因」という項目がでてきます。この白書では1980年版から「各地域の経済情勢と対日貿易の動向」という項目があり国別の概況が、主要先進国に関しては商品別概況もでています。

こうしたことから日米経済摩擦は、1970年代の後半の77年位から激化しはじめてきたものと思われます。

2.どんな図書があるか

次にこの問題に関し、どんな本が出版されているかですが、以下のような参考図書で調査します。

①「**日本件名図書目録**」〔025.Ｉ; N　参考室〕

1977年から84年６月までに国内で出版された図書を五十音順の件名(言葉)見出しのもとに収録している文献リストです。第11巻のＩ及びⅡが「経済・経営・財政」です。丁度経済摩擦が激化しはじめている時期にかさなるのでピッタリの参考図書です。

経済関係(日本)、経済関係(日本—アメリカ)という見出しのもとで書名に「摩擦」という言葉がはいっている本をひろうと約30タイトルほどあります。この参考図書は、今後毎年追加が発行される予定になっており、すでに85年版が出版されています。

②「**出版年鑑**」〔025.1; S〕

毎年その前年中に発行された新刊書籍を日本十進分類法(N.D.C.)によって分類し、収録したもの。

国際経済(333)と貿易(678)のところにでてきます。

③「**経済図書総目録**」　**1986**」〔参考室用品コーナー〕

参考室の南壁面中央部に旅行案内、海外留学参考書、卒業アルバムなどとともに1986年版の各分野・主題の市販図書目録がおいてあります。これはそのなかのひとつ。昭和60年９月現在刊行されているものと昭和61年３月までに刊行予定のものを収録。二行(40字)以内のごく簡単な内容解説があります。「国際経済」及び「貿易」のところに文献がでてきます。

以上の参考図書の調査により36タイトル(内「日本件名図書目録」から30タイトル)、そのうち同志社の図書館にあるものが15タイトル。以下にそれを出版年順に紹介します。尚、原則としてタイトルに「摩擦」という言葉があるものを中心にひろいあげているので、「市場開放」とか「関税障壁」といったものも含めるともっとずっと多くなるはずです。

○**国際経済学の基礎**　小田正雄著　マグロウヒル好学社　1981　215p.〔333.6; 016-2〕

○**日本企業の多国籍的展開—海外直接投資の進展—**　池本清、上野明、安室憲一著　有斐閣　1981　237p. 有斐閣選書　〔335.5; Ｉ9〕

○**日本の選択—日米経済・摩擦か協調か**　マーク・Ａ・ジンマーン著　大塚茂訳　徳間書店　1981　247p. Japan's choice の飜訳　〔332.81; Z3〕

○**新しい貿易政策—貿易摩擦の経済分析**　小田正雄著　千倉書房　1982　187p.〔678.1; 0〕

○**技術移転と文化摩擦**　川野重任編　大明堂　1982　229p.〔509; G2〕

○**日米経済紛争の解明—鉄鋼・自動車・農産物・高度技術**　I.M.デスラー、佐藤英夫編　丸茂明則監訳　日本経済新聞社　1982　384p.　Coping with U.S.—Japanese

economic conflict　の翻訳　〔333.6;C19〕

○**日米経済摩擦―表の事情ウラの事情**　小倉和夫著　日本経済新聞社　1982　246p.　〔333.6;O23〕

○**貿易フリクション―世界は経済戦争に入るか**　大来佐武郎、佐藤隆三編　有斐閣　1983　284p.　有斐閣選書　〔678.1;B4〕

○**貿易摩擦と経済政策**　北田芳治編　大月書店　1983　318p.　現代資本主義叢書　23　〔333.O21;B2〕

○**文化と経済発展**　水野正一〔ほか〕編　名古屋大学出版会　1983　245p.　国際経済摩擦研究叢書　1　〔302.2;B〕

○**日米オレンジ交渉―経済摩擦をみる新しい視点**　草野厚著　日本経済新聞社　1983　237p.　〔333.6;K49〕

○**太平洋・アジア圏の国際経済紛争史　1922―1945**　細谷千博編　東京大学出版会　1983　286p.　〔333.6;T21〕

○**貿易摩擦のメカニズム―日米貿易政策形成過程の比較研究**　東力著　東洋堂　1984　34,228p.　Japanese trade policy formation　を加筆修正したもの　〔678.1;H5-2〕

○**国際貿易と経済摩擦―日本と西ドイツの比較研究**　小川英次〔ほか〕編　名古屋大学出版会　1984　169p.　〔678;K7〕

○**日米経済摩擦―アメリカの主張**　スティーブ・コーエン著　山田進一訳　TBSブリタニカ　1985　262p.　Uneasy parthershipの翻訳　〔678.253;C4-1a〕

3.雑誌・紀要の記事・論文及びより新しい図書

日米経済摩擦のような時事的な問題では、単行書より雑誌・紀要類の論文のほうが量も多く、よりアップ・ツウ・デイトな資料がえられる可能性が高いと思われます。その調査には次のような参考図書を使います。

①**「経済学文献季報」**（参考室二次文献コーナー）

経済学および関連分野において定評ある文献リスト。内外の雑誌論文とともに邦文図書も収録。昭和37年度以降ずっと年3回発行。邦文雑誌、欧文雑誌、ソビエト雑誌も含み、そのうえ日本で市販の図表も同時に探せるので便利です。毎号著者名索引、年度の最終号には年間著者名索引が掲載され、原著者、翻訳者(日本文献のみ)でも探せるようになっています。ただし、累積版がないので数年以上にわたって探すときは大変です。

「国際経済・世界経済」及び「外国貿易」の項目にそれぞれ経済摩擦の論文がでてきます。

②**「雑誌記事索引　人文・社会編」国立国会図書館編**

（参考室二次文献コーナー）

3ヶ月毎に年4回発行。経済学文献季報より早く情報がでます。また、5年毎に累積版がだされ、その件名索引、著者索引もあるので、過去にさかのぼってさがすのに大変便利です。

「国際経済」及びその項目のなかの小項目「貿易」のところに関係論文がでてきます。85年度1年間では52雑誌、117件の記事・論文がこれで見つかります。

③**「月刊雑誌記事索引(JOINT)」**

「経済産業誌記事索引　JOINT累積版　80/84」

（参考室二次文献コーナー）

通称 JOINT と呼ばれ、月刊のものは「JOINT A経済編」と「JOINT B産業・企業編」の二種出版されています。経済学文献季報や国会図書館の雑誌記事索引が学会誌・大学紀要などに重点をおいているのに対し、JOINT は、一般商業誌、実務誌、経済団体や業界団体の機関誌、官公庁や銀行の月報などを対象にしています。

④**「経済学文献月報」**(「経済評論」巻末　P330.1;K19)

大阪市立大学経済研究所の編集で、学会誌、大学紀要などに重点がおかれ、雑誌だけでなく図書も含まれるため大変便利です。月刊ですから速報性に秀れています。

⑤**「国際問題文献月報」**(「国際問題」巻末　P319;K)

図書、雑誌、紀要・学会誌のみならず新聞も含んでいるところに特徴があります。これも月刊誌に掲載されるので速報性にすぐれています。「国際経済状況」や「日本の状況」のもとの「対外関係」「日米関係」といった項目に多く文献がでてきます。

⑥**「新聞・雑誌発言者カタログ　81―82」**

⑦**「新聞・雑誌発言者カタログ　81―82」**

（参考室二次文献コーナー）

1981―82年の2年間をカバーするだけですが、主要新聞、主な地方新聞まで含むという特徴があります。

⑧**「先進国間貿易摩擦に関する文献目録　(1)～」**

(国立国会図書館月報　1986.7, №304～)　(P016;K3)

雑誌論文のみですが、1965年の文献から年代順に連載中で、現在8月号で(2)、1970年まで発表されています。今後毎月発表の予定です。

4.政策、資料を含む逐次刊行物

いろいろありますが紙数の関係でごく少数に限定。

①**「貿易と関税　月刊」**〔P678;B〕

②**「海外市場　月刊」**〔P678;K〕

③**「月刊　ニュー・ポリシー　新政策資料集大成」**

〔317;G14〕

④**「貿易年鑑」**〔678;B〕

⑤**「海外市場白書(年刊)」**〔678.21;K〕

⑥**「経済白書(年刊)」**〔332.81;K〕

⑦**「通商白書(年刊)」**〔678.21;T2〕

（調査はすべて今出川図書館）

図書館学に関する二次文献（上）

今回は本学今出川図書館所蔵の図書館学に関する二次文献を紹介します。国内の出版のもので外国文献を除き、明治期より現在までをそれぞれの収録期間で、順次遡及するものを中心に、その主要文献を紹介することにしました。(書名は『　』で囲み題名は“　”で囲む)

〔文献案内〕

1. **『図書館学・情報科学文献の検索および特殊資料の利用』**国立国会図書館編・刊　1983（㊫028.01；K）

二次資料を詳しく解説しており、国内主要各書誌の収録期間を図表にしてあり時代の流れがつかみやすい。

2. **“文献案内”**『図書館・情報学のための調査研究法』緑川信之ほか著　勁草書房　1986　p.106～120（㊫014.9；T7）所収

比較的新しいもので、日本及英米を中心とする主要文献（雑誌・参考図書・二次資料）をリストにしている。

3. **“参考文献案内―図書館・情報学(Ⅰ)―”**武者小路信和『書誌索引展望』Vol.9 No.3　1985年8月p.36～39（㊫P020.1；S18）所収

主として図書館・情報学全般を対象とするカレントな書誌的トゥールを上げている。

〔書誌の書誌〕

4. **“図書館学書誌の書誌”**天野敬太郎『図書館界』Vol.20 No.6　1969年3月　p.201～231（㊫P010.1；T）所収

1968年末までに発表された図書館学書誌の書誌である。図書、図書中の記事、雑誌記事、新聞記事から429点を掲載している。雑誌に掲載されたものが多い。

5. **『主題書誌索引』**深井人詩編　日外アソシエーツ　1981　（㊥028；F2）

1966年から1980年までに発表された図書と雑誌の文献目録が収められている。「日本十進分類表」（NDC）新訂8版に準拠して分類し、本文は分類見出し項目を50音順に配列している。

6. **“主題書誌”**井門寛、上河辺定利、深井人詩、『書誌年鑑』深井人詩・朝倉治彦共編　日外アソシエーツ　1982～（㊥028；A3）

特定の主題、テーマのある人文・社会科学とそれに関連する分野の書誌。配列は「日本十進分類法」新訂8版に準拠して分類。1980年1月以降発表された図書、雑誌の書誌が収められている。

〔一般的書誌〕

7. **“図書館学文献目録”**天野敬太郎『書研究』Vol.7～15　1934年～1942年（㊫P010.1；T10）所収

明治初年から昭和7年末までの図書及雑誌論文の目録を「日本十進分類法」により分類し、Vol.14、15（昭和16、17年）に掲載している。又昭和8～14年までの目録はVol.7～13（昭和9～15年）に掲載している。年次的にみて掲載の順序が逆になるので注意を要する。（雑誌名の書は一字で図書館と読む）

8. **『図書館学及書誌学関係文献合同目録』**間宮不二雄ほか編　青年図書館員聯盟　1938（㊨016.02；S）

昭和10年末までに出版された図書及雑誌文献2,435点を収録。23図書館の総合目録であるが、今では重要な書誌の役割も果している。著者索引を付す。

9. **“書誌学（図書・書目・出版）に関する論文”**天野敬太郎『出版年鑑』東京堂編・刊　昭和10～16年版（1935～1941）（㊫025.1；S4）所収

昭和9～15年に出版された図書及雑誌を毎年連載している。現在の出版ニュース社のものとは全く別のものであることに気をつけたい。

10. **“書誌学関係文献目録”**天野敬太郎『書籍年鑑』協同出版社編・刊　昭和17年版（1942）p.963～992（㊫025.1；S5）所収

この書籍年鑑は前出9.の東京堂の「出版年鑑」の移譲を受け、協同出版社が改題の上新しく刊行した。昭和16年の単行本と雑誌論文の目録である。

11. **“書誌学関係文献目録”**天野敬太郎『日本出版年鑑』協同出版社編・刊　昭和18年版（1943）p.261～291（㊫025.1；N2）所収

この年鑑は前出10.の書籍年鑑と書誌年鑑を併合改題したもので、昭和17年の単行本と雑誌論文の目録である。

＊時期的には9.10.11.は7.の「書研究」の“図書館学文献目録”に続くものである。

12. **“書学文献目録”**天野敬太郎『図書館総覧―昭和13年版―』青年図書館員聯盟　1938　p.261～278（㊨020.2；A）所収

明治期より昭和12年までの主要な和洋の単行書と「図書館雑誌」及「書研究」所載の主要論文を収録。

13. **“図書館学及書誌学文献目録”**『図書館総覧』天野敬太郎編　昭和26年版（1951）p.137～144

(㊧020.2；A-la)、(閉010.36；T2) 所収

時期的には前出12．の昭和13年版の目録の続篇であるが、この目録は単行本のみを掲載している。主として昭和13年から26年３月までの単行本を掲げている。

14．『図書館学文献目録』 日本私立大学協会編・刊 1971 (閉㊥028.01；N)

昭和44年12月末までに日本語で刊行された図書館学著作と、昭和20年以降昭和44年12月末までに発表された論文記事の目録である。約4,300タイトル紹介されている。「日本十進分類法」第７版010図書館の分類綱目を利用して区分、更に細分している。巻末に著者名索引がある。

15．“図書館学年次文献目録” 深井人詩、目黒聰子 1971～『図書館学会年報』Vol.8 No.3 1973～ (閉P010.1；T3) 所収、(閉㊥028.01；N3)

分類は「日本十進分類法」の図書館部門に準拠し、単行書と雑誌論文を年間1,660件掲載している。図書館学に重点を置き、ドキュメンテーションの分野や直接現在の図書館業務に関係しないものは省略している。

○1971～1979年 (閉P010.1；T3

○1971～1979年 (閉028.01；N3

自館で雑誌よりコピーし、２分冊に製本したもの

○1980～別冊形式 (㊥028.01；N3

16．『図書館情報学研究文献要覧〔1970～1981〕』 深井人詩、目黒聰子共編 日外アソシエーツ 1983 (㊥028.01；F)

前出15．の累積版である。前出14．の収録期間が昭和44年末までなので、当文献要覧は昭和45年分から収録し昭和56年末までの12年間を集積している。分類は「日本十進分類法」新訂７版に準拠。単行本一冊全体が邦文図書と雑誌論文の目録として発表された例は少ない。

17．『雑誌記事索引―人文・社会編―』 1948～ 累積索引版 日外アソシエーツ編・刊 1975～ (㊥P027；Z3)

○1948～1974（第Ⅰ～Ⅳ期）シリーズⅦ

教育・文化編の図書館、図書・雑誌の項目。

○1975～1979（第Ⅴ期）学術・文化編となる。

主題の相関索引及著者名索引が各巻にある。1―2期と3―4期それぞれをまとめた総合索引著者名編、総合索引件名編もある。５年間で約4,000件を収録している。

18．『図書・雑誌・ジャーナリズムに関する27年間の雑誌文献目録』 昭和23～昭和49年 日外アソシエーツ編・刊 1982 (㊥028.02；N)

19．『文化行政・法制・図書館に関する27年間の雑誌文献目録』 昭和23年～昭和49年 日外アソシエーツ編・刊 1984 (㊥028；N11)

前出17．の「雑誌記事索引（人文・社会編）累積索引版」の第Ⅰ～Ⅳ期（1948～1974）をもとにそれぞれ18・19に関する文献目録として再編成している。この27年間に発表された雑誌文献約14,000件をそれぞれ収録している。

20．“出版（図書）・図書館関係雑誌記事索引” 1950～『出版年鑑』出版ニュース社 1951年版～ (閉025.1；S) 所収

雑誌「出版ニュース」に毎月掲載されている“出版文献資料”の年間累積版。各年度中に発行される雑誌記事から出版・ジャーナリズム、図書館学、情報科学関係のものを巾広く収録し、年間1,660件を掲載している。分類は「日本十進分類法」に準拠、各標題のＡＢＣ順に配列している。

21．『ドクメンテーション関係国内文献リスト』 第１集（1970～1974年）、第２集（1975～1979年）、日本ドクメンテーション協会編・刊 1981、1983 (㊥028.014；N)

雑誌「ドクメンテーション研究」に毎月掲載される文献紹介の５年間累積版である。文献紹介で取りあげられた論文2,300件にその他必要と思われる文献700件を補足して3,000件を掲載している。国際十進分類法（ＵＤＣ）で配列している。

22．“図書館関係図書・資料目録、図書館関係主要雑誌目次一覧” 1978～『図書館年鑑』日本図書館協会編・刊 1982～ (㊥010.5；T2)

図書・資料目録は、分類の項目毎に書名の五十音順としている。雑誌目次一覧は、各雑誌を五十音順に配列、それぞれの巻号順に掲げている。いずれも前年１年間の分を収録している。

23．『図書館関係専門家事典』 日外アソシエーツ編・刊 1984 (㊥010.35；T)

最近10年間の図書館に関する文献の多い日本人559名を選び、主として1970年１月～1982年12月までに刊行・発表された文献を採録している。各人の略歴など簡単な人物情報も付加している。著者名から調べたい場合に便利である。

24．“図書館関係雑誌記事索引” 1952年～『図書館雑誌』1952年２月～ (閉P010.1；T2) 所収

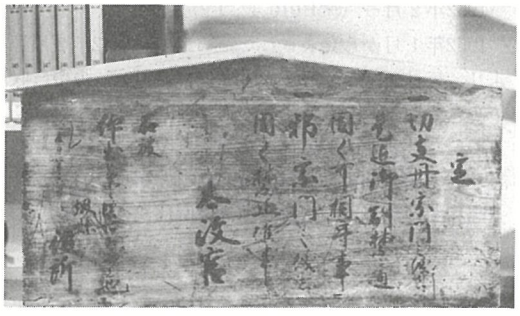
1952年１月から発表された雑誌記事を1952年２月号より、毎月連載している。目次の“資料室”の中に収められている。なお、過去にこれと同種のサービスをしていたことがある。第４～９号（明治41～43年）“図書及図書館に関する記事論説一覧”と第132～154号（昭和５～７年）“図書及図書館関係論文”である。

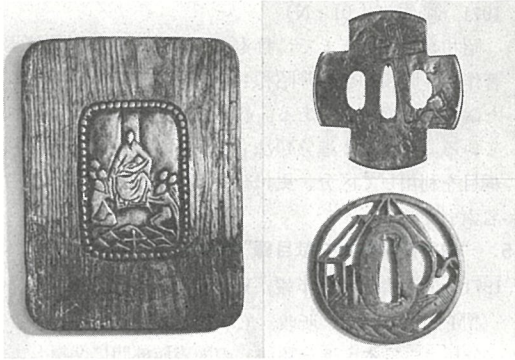
〈キリシタン関係資料展〉案内

――今出川図書館展示コーナー――

本学図書館の展示もしばらくお休みしていたが、上記テーマで今秋10月20日から30日まで10日間、地階展示コーナーで行う予定です。展示資料については本学図書館、神学部、考古学、本部など主として同志社が保存しているキリシタン関係資料であり、限られた資料であるが展示会を開催することにしました。以下、簡単に展示予定の資料について紹介します。

1．**切支丹制札**　天和二年、正徳元年、慶應四年の各制札（図書館、神学部、考古学所蔵）これはキリシタン禁令と褒賞金額を記した高札で、江戸幕府によって禁止されたキリシタン宗門に対して、信者の摘発を奨励するため密告者に賞金を与えた制度であり、絵踏、五人組制、寺請制などとならぶ主要なキリシタン禁教政策の一つである。2．**踏絵**　板踏絵１点（帆足氏所蔵）和紙１枚（図書館所蔵）寛永５年（1628）に絵踏が開始され、明治４年に全面的に停止されるまで長い間にわたって行われた。3．**宗門改**　数点（図書館、神学部所蔵）江戸幕府がキリシタンを禁圧するために設けられたもので、キリシタンかそうでないかを調べる制度。明治６年キリシタン制札廃止とともに中止された。4．**切支丹鍔**（ツバ）　３点（神学部所蔵）キリシタン大名やキリシタン武士が刀にはめていたもの。5．**石硯**（南蛮寺関係と推定される遺構から出土したもの）（考古学所蔵）裏面に人物線画が表わされている。6．**織部南蛮人燭台片**（本学校地で出土したもの）（考古学所蔵）7．**排耶書**（反キリスト教書）（図書館所蔵）元和６年（1620）反キリシタン書として最初に刊行されたキリシタン改宗者ハビアンの「破提宇子（ハダイウス）」、寛文２年（1662）林羅山の「排耶蘇」（羅山文集）、水戸





藩が南禅寺金地院崇伝に命じて「伴天連追放之文」を起草させた、いわゆる「排切利支丹文」（これは元和、寛永におよぶ徹底的なキリシタン弾圧を開始した宣言文ともいえるもの）、鈴木正三の「破切利支丹」、正保５年の「対治邪執論」、「切支丹宗門来朝実記」、「南蛮寺興廃記」等々8．宣教師**ギュッラフ訳「約翰福音之伝」**（本部所蔵）鎖国下、日本宣教ができなかったため、シンガポールで日本人漂流者の協力の下に刊行した本邦最初の邦訳聖書。9．宣教師**ベッテルハイム訳「路加伝福音書」（漢和対照**（神学部所蔵）と**平仮名訳の「約翰（ヨハネ）伝福音書」、「使徒行伝」**（共に図書館所蔵）（ベッテルハイムも来日することができなかった）10．宣教師**ゴーブル訳「摩太福音書」**（図書館所蔵）明治６年２月のキリスト教解禁前の明治４年に日本ではじめて邦訳したもの。以上。

なお、本学図書館正面前右側の植込の中に**南蛮寺の礎石**が置かれています。これはイエズス会のオルガンティーノらが京都の蛸薬師室町西入ル姥柳町に建立した天主堂で、天正15年（1587）秀吉に破却された。1973年本学考古学研究室で調査され、それを機に土地所有者タキカ株式会社の好意で本学にその礎石が学術資料として寄贈されたことが立札に書かれています。

〈新島襄・同志社関係資料展〉案内

―― ラーネッド記念図書館展示コーナー ――

ラーネッド記念図書館２階メインカウンター右側の展示コーナーは、新刊受入図書の紹介および日頃皆さんの目にふれない珍しい図書資料、特定のテーマ（例：同志社の歴史）に関する図書資料などを展示紹介するために設けられたものです。

この４月の開館以来〈新着受入図書〉、〈新島襄・同志社関係資料〉を展示して好評を得ております。展示中の資料の内容を簡単に紹介いたしましょう。

◇新着受入図書◇

ラーネッド記念図書館では、半月毎に約200～250冊の新刊・新着図書を受け入れていますが、その中から皆さんに紹介したい図書を選んで約２週間展示しています。

展示後は、開架閲覧室、参考図書・雑誌室などの各コーナーの該当書架へ配架いたします。

◇新島襄・同志社関係資料◇

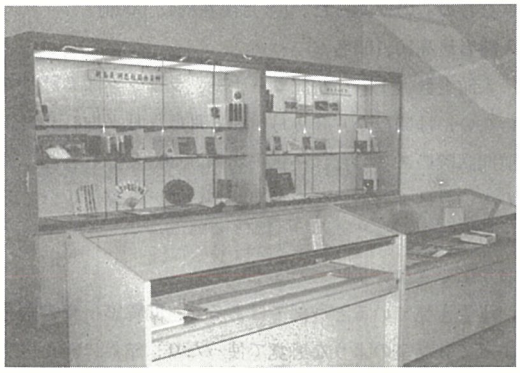
田辺校地には、同志社の歴史を物語る建物、新島遺品庫などがありませんので前項の〈新着受入図書〉の展示と併行して新入生諸君をはじめ、利用される皆さんに“新島襄を知り、同志社の歴史を知る”ための〈新島襄・同志社関係資料〉として簡単な説明文を付して100点近く展示中です。主な展示資料はつぎの通りです。

⊙「新島襄」関係

〈全集・書簡集〉○「新島襄全集」（全10巻　新島襄全集編集委員会編　1983～　続刊中）○「新島襄書簡集」（同志社編　岩波文庫　1954）○「新島先生書簡集・同続編」（森中章光編　1942～60）〈年譜・伝記〉○「新島襄略年譜」（パネル）○改訂・増補　新島襄先生詳年譜」（森中章光編　1959）○「新島襄の生涯」（J.D.デイヴィス著 北垣宗治訳　1977）○「Life and letters of Joseph Hardy Nee-sima」（Arthur Sherburne Hardy 著　1891刊の再版）〈研究誌〉○「新島研究」（同志社新島研究会　1954～）〈写真・遺墨・その他〉○函館から脱出直前、新島襄・八重夫妻（明治９年１月結婚当時）などの写真○良心碑“良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ”の一節が含まれている学生横田安止宛の書簡（写）○ワイルド・ローバー号のレリーフ

⊙「同志社」関係

〈図書・雑誌〉○「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意」（新島襄）○同志社百年史」（全４巻　1979）○「同志社談叢」（同志社社史史料室　1981～）〈写真〉○同志社最初の校舎（明治９年９月竣工）、明治19年頃の同志社キャンパス、彰栄館等重要文化財指定の建物

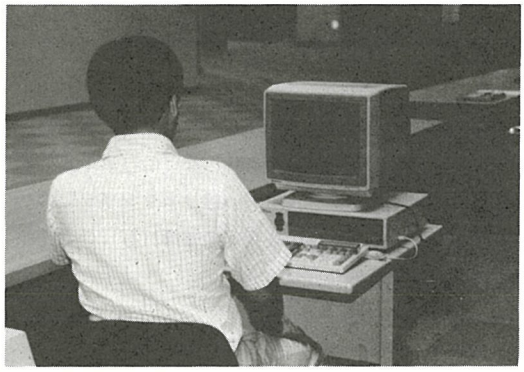


なお、展示中の資料は、閲覧できますので利用ご希望の方はカウンターの係員に申し出て下さい。

その他の資料は、第１開架閲覧室分類番号「099（同志社関係）」の書架に配架しています。展示資料は、今後順次入れ替えて少しでも多く紹介する予定です。一度ご覧頂くとともにご利用下さい。

ラーネッド記念図書館カウンターから

《一館員の雑感》



4万2千冊でオープン！

ラーネッド記念図書館は学習図書館としての位置付けで、当初35,000冊収集の目標が関係者の大きな努力によって約42,000冊配架でスタートできた。一口に42,000と、いっても図書選択から発生、配架に至るまでの作業は並々ならぬものがあった。（8月現在約47,000冊）

入館者最高10,100名!!

入館者数（1階の新聞コーナー、ラウンジは集計していない）は開校から3ヵ月目の6月は一日平均4,400名、前期試験のある7月は一日平均約5,300名であった。最も多い日は1万百余名を数え、多いことは喜ばしいことである。

静かにできない？

学生を見ていると一部ではあるが、閲覧室・読書室をまるで談話室のような感覚で使ったり、館員に静かにするよう注意を受けるまで気がつかないというか、気にしない者がいる。また、外からワイワイ喋りながら入館して来るので騒々しくて仕方がないのもいる。カウンターから手を挙げたりして制しても気がつかないのであるから困ったものである。

暑くても50名！

2階にあるカウンターの場所は吹抜けホールになっていて、天窓が明りを兼ねているので、休み明けの日などは冷房が稼働していても熱気の去るのが遅い。しかし出てくる学生は閉館時間まで熱心に机に向かっている。

夏場は足の便が悪いこともあってか入館者数が一日平均50名位であった。

“延滞は友達が困ります”

面白いことに図書を返却する時、一日位遅れた学生は恐縮しながら謝って返すが、何故か、長期間遅れている学生に限って、何やかやと理由にならないことを述べたてゝは館員を困らせている。郵便を出し、電話を何度もかけ督促をする手間もさることながら、館員が困るのは、次の予約者にその図書が何時返ってくるのか伝えられないことである。借りた学生の不注意から他の学生に迷惑がかかっていることなど意に介していないのではないかと思う程である。自分を予約者の立場に置き換えれば自明のことだとおもうのだが……。

機械検索もできます

目録コーナーには電算機で打出した冊子目録が置いてある。片やカウンターには目録検索用端末機があって、質問の内容によっては館員がこれを動かして検索の手助けをしている。ラーネッド記念図書館所蔵図書については併用して検索することができるので利用してほしい。

特別装置がある？

女子便所には痴漢防止用の釦がそれぞれに取付けてあるが見学者が時々試しに押すこともあって、思わず緊張させられる。

蔵書の充実—よりよい図書館に—

今の図書冊数では学生からすれば少ないと思っているむきもあろうが、勉学に対応できるよう常に留意している。これからも蔵書を増やしていくのでどしどし活用してほしいと願っている。学生の購入希望図書申し込みは（月平均10件位あり）も尊重して図書館としての機能と図書資料の充実、発展に力を注いでゆきたいと思っている。

〝びぶりおてか〟　同志社大学図書館報　No.40　1986年10月15日 発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電　話 251—3971

編集責任者　西　田　逸　郎（図書館庶務課長）　印刷ワールド